広島女学院大学国際教養学部紀要第５号
BULLETIN OF THE FACULTY OF LIBERAL ARTS 5
HIROSHIMA JOGAKUIN UNIVERSITY

「夢十夜」の教材研究
－第一夜の素材的研究を中心に－

植西　浩一

A study of teaching materials based on Soseki Natsume`s Ten Dreaming Nights with special reference to “The first night”

Kouichi Uenishi

キーワード　教材研究　陶冶価値　夏目漱石　先行研究　主体的・対話的で深い学び　(F ＋ f)

１．はじめに

飛田多喜雄は、「教材」を次のように定義づけている。

> 教材とは、学習者に有効な学習経験をさせ、必要な能力や価値を得させるために選択された具体的な陶冶材である。指導者の立場からいえば教える内容であり、学ぶ者の立場からいえば学習する内容である。(傍線＝引用者　以下の引用も同様)[注1]

飛田は、さらに「教材研究」について次のようにいう。

> 教材研究とは、そうした価値体である教材を、学習指導が効果的になされるように、実践的な教育的交渉の場に焦点をおきながら、事前にあらゆる角度から総合的・分析的に研究して陶冶価値の所在をみきわめ、教材そのものの性格を決定することである。[注2]

飛田が「陶冶材」、「陶冶価値」と繰り返し強調しているように、その作品で何が学べるか、どのような能力が身につくかを徹底して研究することが、教材研究である。しかし、今、この教材研究が疎かになってはいないだろうか。背景には、学校現場の多忙化で多くの業務に忙殺される教員がその時間を取れないという状況がある。

しかし、同時に、授業者が方法や活動のみに目を奪われ、教材研究が二の次になっていることもままある。「教材観」も、昨今は記述が簡略になり、指導者の解釈や教材への思い、こだわり等が感じられるものが少なくなった。また「評価規準」も、学習指導要領の文言の引き写しであることが多く、そこからも「教材」は見えてこない。

もちろん、教師主導型の教え込み、知識注入に走る授業が改善されなければならないのは言うまでもないし、中央教育審議会答申で高等学校の授業が問題視され、改善が求められる状況があることは理解している。[注3]

しかし、新学習指導要領が提起する「主体的・対話的で深い学び」を具現化するためには、指導者がまず教材を深く読み込み、多様な学習者の反応に答えられるだけの準備を整えておかなければならない。また、学習者相互の対話を拓くためには、教師がファシリテーターあるいはコーディネーターとしての役割を担わなければならないことも多いが、これとてその役割のみに終始したのでは学びは深まらない。この点について、早く久田敏彦は、「支援」という言葉が広まりつつあった学校現場の状況の中で、「「指導から支援へ」を強調することで教師の指導性の軽視を招来する」ことを批判し、教師と児童・生徒の「「主体－主体」とでもいうべき関係性、換言すれば「相互主体性」にほかならない」関係の構築の必要性を訴えている。[注4]

学習者と指導者が相互に尊重し合い、対話的な関係性の中で学びを深めていく主体－主体の授業の中で、教師が管理的な方法を採ることなく、その指導性を発揮するためには、まさに底深い教材研究が求められる。前述のように教員をとりまく環境は厳しいが、授業を充実させることの大切さを再確認し、それぞれの教員が教材研究に力を注げる環境を整える必要があろう。

今、一つ、教材研究で問題になるのが、専門的学問分野の研究と学校現場での教材の扱い方や教科書の編成が乖離していることである。たとえば、「万葉集」について、梶川信行は、「教科書の『万葉集』は昭和の

ままである」とし、その内容の古さを指摘して、次のように述べる。

これは一人『万葉集』の問題ではない。教科書の古典の教材には、どんな問題が潜んでいるのか。教材とされたものに関する研究の現状はどのようなものなのか。－中略－研究者の側から情報を提供し、それを世間の方々に知っていただくことで、現在のチグハグな状況が少しでも改善すればと念じている。注5

この梶川の指摘は、古典教材のみならず近代の文学作品にも少なからずあてはまる。とりわけ夏目漱石の作品については、まさに長年にわたる研究の蓄積がある。しかし、にもかかわらず、「万葉集」同様、研究と実践の往還は不十分であり、教材解釈、教科書の編纂、授業化にあたっての目標設定や展開に、長年にわたる文学研究の成果が反映され、生かされているとは言い難い。

本稿では、高等学校の教科書に掲載されている「夢十夜」を取り上げ、文学研究の成果をふまえた教材研究を行うとともに、併せて近代文学作品の教材研究と授業の在り方についても考える。

2．国語科教材としての「夢十夜」

近年、「夢十夜」は少なくない数の教科書で取り上げられるようになり、現行教科書では、６社 11 種類の教科書に掲載されている。この「夢十夜」で特筆すべきは、現在は、掲載箇所がすべて第一夜と第六夜、あるいは第一夜のみとなっていることである。第一夜は、文章も美しく、また高校生にとって比較的抵抗なく読み取れる作品である。またそれぞれの読者が想像力を働かせて思い描く夢の世界は、その感性によって様々に違いを見せるように思われる。後述するように、研究者によって作品解釈も大きく異なる。それだけに、教室で広く意見交流することにより、他者のものの見方や感性に触れ、自らの論理の立て方や感性、その価値観をゆさぶられ、テクスト及び他者との対話を通した自己の見直しや変容が期待できる作品でもある。また、第六夜は、寓意性が強く、文明批評的な要素を強く持った作品で、作者の文明批評を現代社会にもあてはめて考えることで、現代社会の在り方を見つめ直すとともに、近代文学を 21 世紀の今、教室で読むことの意義を再確認できる作品でもある。なお、後述するように高校生からは、第七夜が圧倒的な支持を受けたという報告もある。また、現在取り上げられていない他の夢も、教材として魅力的である。教科書への掲載部分については、今後も検討する必要があろう。本稿では、この点もふまえつつ、先行研究も多く、研究者の読みも分かれる第一夜を中心に「夢十夜」を分析･検討するとともに、それを教材研究にいかに反映させ、学習指導の改善に生かすかについて考察する。

3．「夢十夜」の成立とその背景

「夢十夜」は、明治 41(1908) 年 7 月 25 日から、『東京朝日新聞』に、また 7 月 26 日から『大阪朝日新聞』に連載され、いずれも 8 月 5 日に連載を終了している。注6　また、単行本としての出版は、明治 43(1910) 年 5 月の『四篇』で、「文鳥」、「永日小品」、「満韓ところどころ」と共に収録されている。注7

明治 41(1908) 年の 1 月から 4 月まで、漱石は「坑夫」を朝日新聞紙上に連載しており、「夢十夜」は、これに続く連載となる。この時期には、3 月に弟子の森田草平が平塚らいてうとのいわゆる「煤煙」事件を起こしており、漱石は草平を 4 月まで引き取っている。漱石はまた、9 月から 12 月まで、「三四郎」を連載、翌明治 42(1909) 年 6 月から 10 月まで「それから」を連載、さらに翌年の明治 43(1910) 年 3 月から 6 月までは、「門」を連載する。「前期三部作」あるいは「中期三部作」と称されるこれら三作を執筆した時期である。そして、この年の 8 月 24 日に転地先の修善寺で吐血し人事不省となり生死の境をさまよう。世に言う修善寺の大患である。注8

この「坑夫」から「夢十夜」を経て「三四郎」に至る漱石の仕事を、佐藤泰正は、次のようにとらえている。

漱石はこのような自然主義思潮を横目に見つつ、「坑夫」という異色の作を書き進めた。そこにはいわゆる「無性格論」なるものが説かれ、漱石文学の中枢をなす〈意識〉の領域への鋭い踏み込みがみられる。－中略－漱石はここで前作「虞美人草」とは対極的な地点に踏み出すとともに、自然主義文学の告白や事実の叙述なるものの限界をも鋭く衝いている。ここにいう「事実」が自然主義のそれと同一でないことはいうまでもなく、漱石は人生の内実とは「纏りのつかない事実」の連続であるとすれば、それ

は〈意識〉とどうかかわるか、作者の、さらには作中人物の〈意識〉の捉える外界とは、現実とは、何かを問いつめてゆこうとする。これは飜っては〈意識〉の底の深層部への志向となり、この課題は「夢十夜」という極めて独創的な作品を生み、さらに「三四郎」以後の世界へと引きつがれてゆく。注9

佐藤の指摘にあるように、人間にとっての「意識」の問題の追究に向かう漱石にとって「夢十夜」は、きわめて重要な作品で、「坑夫」と「三四郎」の間という位置にも着目する必要があろう。「夢十夜」で問題とされる「夢」と「意識」は、「三四郎」の広田の夢や美禰子らの「無意識の偽善」、「それから」でジェームスの学説を引いて展開される代助の意識と夢に関わる言説につながり、後期の作品群において、より深く掘り下げられていく。

また、佐藤が言及しているように明治41（1908）年という年は、まさに自然主義全盛期とも言うべき年で、田山花袋「一兵卒」、正宗白鳥「何処へ」、島崎藤村「春」等がこの年に発表されている。ちなみに藤村の「破戒」は明治39（1906）年、花袋の「蒲団」は明治40（1907）年に世に出ており、この間の自然主義文学のたどった道については文学史上の論議が数多くあるところである。また、川上眉山が自ら命を絶ち、国木田独歩が死去している。さらに二葉亭四迷がこの年にロシアに向かい、翌年、病を得ての帰途、インド洋上で客死することになる。詩歌の世界では、『明星』(第一次)が終刊となっている。このような年に執筆された「夢十夜」であるが、この作品の構想を示すメモとしては、明治40、41年頃に書かれたとされている「断片47G」のうちの「○ Dream」と題された部分がこれにあたるとされている。本稿で焦点化して論じている第一夜に関わると思われる記述には、「moss covered stone」、「Excavation」がある。注10

4.「夢十夜」の本文

現行の教科書本文は、1966年版の岩波『漱石全集』に拠るものが4、1994年版の岩波『漱石全集』に拠るものが2、『漱石文学全集』(集英社 1973)に拠るもの4、『夏目漱石全集10』(ちくま文庫1988)を底本とするものが1である。異同は「自分」が女を埋葬する場面で、1966年版岩波『漱石全集』とちくま文庫に拠るものが、「女をその中に入れた」、1994年版岩波『漱石全集』と集英社の『漱石文学全集』に拠るものが「女をその中へ入れた」、となっている。「に」と「へ」は、意味の変遷が認められる助詞で、明治期の書き手や読み手がどのような意味・ニュアンンスで用い・享受していたかが問題となろうが、「へ」が目標地点や移動の方向性を示す意味合いが強いのに対し、「に」は、場所を指し示す言葉である。「へ」は動的で「に」は静的であるとも捉えられる。この部分の助詞の違いは、女を埋葬する「自分」の「意識」の解釈にも関わると思われ、看過できない異同と言えよう。

また第六夜には、読点の異同がある。また、漢字の用い方に関わる文字表記の異なる部分が、多く認められる。読者が本文をどのような感性を持って享受し、そこからどんなイメージを喚起するかが問われる作品であるだけに、これらの異同についての考察は重要である。

現在、岩波書店は、『定本漱石全集』を刊行中で、この全集は、作者の原稿が残っているものについてはこれに拠るという編集方針を採っている。石原千秋は、このような原稿に基づく翻刻の在り方を批判し、「原稿は、一度ゲラで漱石の校正を経てから新聞に発表され、さらにその新聞の切り抜きに漱石が朱を入れたものが単行本として刊行されている」、「たとえば『三四郎』。新聞に掲載された本文の、科学的な事柄に関する記述について、漱石は単行本にする際に手を入れた。ふつうならば、最後に活字になったその単行本が『三四郎』の本文となるべきだろう。これほどはっきりした例ではなくとも、他の小説でも事情は同じである」とし、「伊藤整・荒正人が編集した集英社版の『漱石文学全集』の普及版をいまだに使っている」と述べている。注11

また、三好行雄も、「日本の全集で、本文が編者の固有の方法論によって作られた本文である、という例はいくつかある。岩波書店版の「漱石全集」や「透谷全集」などがすぐに思いうかぶ(それに対して、わたしたちはすでに集英社版の「漱石文学全集」の本文と、筑摩書房版の「明治文学全集・北村透谷集」の本文とを持っている)」と、岩波版に対する批判的見解を示している。注12

近代の文学作品の本文においても、古典文学同様、底本をどこに求めるかは、重要な問題である。とりわ

け漱石においては、「虞美人草」以後の作品が、新聞小説として発表され、その後に単行本として刊行されているため、原稿、新聞小説、単行本のいずれを取るかが問題になる。教科書本文の採録にあたっては通常は全集本文に拠ることになるだろうが、石原や三好の言説をふまえての吟味・判断が求められよう。また、岩波版等の全集の改訂の折には、教科書本文を改めるべきかどうかの検討が求められる。

「夢十夜」の本文については、岩波の最新刊の全集である『定本漱石全集』の編者が、「現存の有無を確認できず参看できなかった」ため、『大阪朝日新聞』を底本としており、その理由について、「漱石の書簡に「第一夜は今日大阪へ送り候」とあることから、『大阪』に送られたことが知られる。本全集では、原稿を元に活字化が行われた可能性のより高いのは『大阪』であると考え、底本を『大阪』とすることにした」と述べている。注13

なお、前掲第一夜の異同箇所については、この全集が「女を其の中へ入れた」、単行本『四篇』として刊行された際の本文も「女を其の中へ入れた」となっている。注14　また、「夢十夜」は、2016年３月に朝日新聞に再連載された。このときのものは、『東京朝日新聞』を底本に現代仮名遣いに直されているが、この本文も「女をその中へ入れた」となっている。

以上のことをふまえ本稿の本文の引用に際しては、単行本として刊行された際のものを用いることとした。「それから」等の引用においても同様である。また、日記等からの引用は、岩波の最新のものがまだ未完であるため、1995年(『漱石全集』第十九巻)、1996年(『漱石全集』第二十巻)刊行のものに拠っている。なお高等学校の教科書の本文として採録される際には、現代仮名遣い、新字体に改められ、また漢字を平仮名表記に改めたり、送りがなを現行の規範に則して改めたりしている箇所が多くあるが、底本を確認するという意味で、本稿ではあえて原文の表記のまま引用し、漢字の字体のみ新字体に改めた。

次に、「夢十夜」の挿絵についてみる。単行本『四篇』に収録された「夢十夜」には、第一夜の冒頭に第六夜の運慶が仁王を掘る姿の挿絵が大きく入れられている。この絵は眼を見開いた仁王が大きく描かれ、その肩口で運慶が鑿と槌を持っている。

教科書の挿絵では、東大寺南大門の仁王像(金剛力士像)の写真を入れたものが７で、このうちの５がカラー写真、２がモノクロ写真である。また、護国寺の山門を描いたカラーの挿絵が１、単行本の挿絵に「『四篇』(「夢十夜」を収録。1910年刊)に掲載された挿絵」というキャプションを添えたものと護国寺の山門のカラー写真の２点をいれたものが１、カラーで描かれた百合の花の挿絵を入れたものが２(このうちの１は、前述の護国寺の山門を描いた絵と同時に掲載)、挿絵を入れていないものが１となっている。学習者のイメージ喚起の上でこれらは少なからず影響を及ぼすはずである。教科書本文の検討においては、挿絵も含めた検討・吟味が必要であろう。

５．第一夜の素材的研究

本節では、稿者の第一夜の本文解釈を示す。先行研究については後述する。

第一夜は、「こんな夢を見た。」の一文で始まる。これは続く第二夜、第三夜、第五夜と同様である。第六夜以降は、冒頭に夢であることの断りはない。これらのうち第十夜では、第八夜で登場する庄太郎のその後が語られており、二つの夢は連続性を持つ。他の夢にはこのようなストーリーの連続性はないが、愛し合う男女が描かれている点で、第一夜は、第五夜、第九夜と親和性が強い。第五夜、第九夜共に男女は再会を果たせないが、第一夜の物語をどう読み取るかは後述するように第一夜の解釈の一つの鍵となる。

第一夜の筋立ては、「女」が「静かな声でもう死にます」、「百年待つてゐて下さい」と「自分」に告げてなくなるが、「百年」を読み手に感じさせる長い不在の後に、「真白な百合」となって姿を現すというものである。この夢は、時代や場所が明確ではない。第二夜が「蕪村」、「侍」等から明確に江戸時代であることが読み取れたり、第三夜が「文化五年辰年」から百年後の物語であるのが特定できたりするのと設定を異にしている。そのような時代や場所に限定されない場面での男と女の物語が展開される点に、第一夜の一つの特色がある。細部の修飾をすべて排除した夢幻的な場において、男と女の物語が語られる。この男と女の関係は、すべて女が主導的であり、男はいかにも頼りなげである。謎をかける女とそれをうまく解けない男としての

三四郎と美禰子を彷彿とさせるものがある。あるいは『彼岸過迄』の「恐れない女と恐れる男」を連想させもする。

女が「もう死にますと判然」男(「自分」)に告げるのを受けて、男は「自分も確に是れは死ぬなと思」う。けれども、「透き徹る程深く見える此の黒眼の色澤を眺め」ると、「是でも死ぬのか」と心が揺らぎ、「死ぬんぢやなからうね、大丈夫だらうね」と女に「又聞き返へ」す。女は、「でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云」う。男は、「どうしても死ぬのかなと思」う。ここに至っても、「かな」という語尾に象徴されるように男の姿はいかにも頼りない。女は、「さうして墓の傍に待つてゐて下さい。又逢ひに来ますから」と男に頼み、「あなた、待つてゐられますか」と男に問う。後述のように、この男が「待つてゐられ」たか否かは、二人の愛の成就がなったのかを考える上で重要である。女は赤い日が出てまたその赤い日が沈む長い日々を「百年待つてゐて下さい」と告げる。「百年」という言葉は前述のように第三夜でも用いられ、重要な意味を持つ。第一夜の百年は「百」という数字の字義を超えた永遠を象徴するような時間でもあろう。授業では、人が百年を生きられるようになった現代の感覚と異なることも、学習者に理解させる必要がある。また、2016年に漱石の没後百年を数えたことを思うと、まさに私たち読み手は、百年後の今、この百年にまつわる物語を読んでいるということも、学習者に実感させたい。

「只待つてゐる」という男の答えを受けた女の「黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうつと崩れ」、やがて女の眼は、「ぱちりと閉じ」、「長い睫の間から涙が頬へ垂れ」、女は死ぬ。男の涙や悲しみは描かれていない。男は、「もう死んで居た」と悟るのみである。「もう」という言葉が示すように女の死は男にとって唐突な出来事として自覚される。男はやはりどこまでも受け身の存在である。

男は女の言葉にしたがって真珠貝で穴を掘り、女の墓に土を持って星の破片を墓標にする。「貝の裏に月の光が差してきらきらした」、「柔らかい土を、上からそつと掛けた。掛ける毎に真珠貝の裏に月の光が差した」、「星の破片の落ちたのを拾つて来て」「抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなつた」等、この部分の描写は美しく、そして静かな哀しみを湛えているかのようだ。

この夜の描写と対照的なのが、続く「大きな赤い日」を眺め暮らす日々の描写である。男は「赤い日をいくつ見たか分らない」、「勘定しても、勘定しても、しつくせない程赤い日が頭の上を通り越して行」くが、「百年がまだ来ない」。「仕舞には」、男は、「自分は女に欺されたのではなからうかと思い出」す。すなわち「あなた、待つてゐられますか」という女の危惧は現実のものとなり、「百年待つてゐて下さい」という女の願いを、男は、少なくとも心理的には裏切ってしまう。「すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来」て、「真白な百合」が男の前に現れる。「すると」という接続語があるように百合は男が女を疑ったそのときに、百合の花として男の前に現前したのであり、ここからも愛の成就は考えにくい。「真白な百合が花の先で骨に徹へる程匂つた」と語る男は百合の強い香にたじろいでいるかのようにも感じられる。「ぽたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた」と描写される百合は、どこか悲しげである。男は「白い花弁に接吻」し、「遠い空を見」る。そこには、「暁の星がたつた一つ瞬いてい」る。「たつた一つ星」の星が男の孤独と共鳴しているかのようである。ここで、男は、「『百年はもう来てゐたんだな』と此の時始めて気が付いた」のである。

男は女自身とはめぐり会えない。物言わぬ百合が姿を見せるのみである。後述するように、永遠の愛や百年を経ての再会を読む論者も少なくないが、稿者は、第一夜をこのように読んだ。

漱石文学における百合の花と言えば、まず想起されるのが「それから」の百合であろう。

次は、代助が重大な決意を伝えるため、二人の思い出の花である百合を生けて三千代を待つ場面である。

> 「今日始めて自然の昔に帰るんだ」と胸の中で云つた。斯う云ひ得た時、彼は年頃にない安慰を総身に覚えた。何故もつと早く帰る事が出来なかつたのかと思つた。始めから何故自然に抵抗したのかと思つた。彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに、純一無雑に平和な生命を見出した。其生命の裏にも表にも、欲得はなかつた、利害はなかつた、自己を圧迫する道徳はなかつた。雲の様な自由と、水の如き自然とがあつた。さうして凡てが幸(プリス)であつた。だから凡てが美しかつた。
>
> やがて、夢から覚めた。この一刻の幸から生ずる永久の苦痛が其時卒然として、代助の頭を冒して来た。

彼の唇は色を失つた。注15

「再現の昔」と並列に描かれる百合は、その中に「純一無雑に平和な生命」を有し、「雲の様な自由と、水の如き自然」を内包する。それは代助の心象風景に「再現」された「昔」であり、現実世界にない「凡てが美し」い世界である。しかし、それは「夢」でしかない。「夢から覚めた」代助は「永久の苦痛に「冒」されねばならない。

ここで漱石の描き出す百合は「平和」、「自由」、「自然」という言葉と共にあるが、現実世界から離れた趣を持っており、どこか淋しくもの悲しい。

同時に「夢から覚めた」代助は、「百合の花の傍へ行」き、「唇が瓣に着く程近く寄つて、強い香を眼の眩ふ迄嗅」ぐ。彼は、「花から花へ唇を移して、甘い香に咽せて、失心して部屋の中に倒れた」いと思う。ここに至って百合は官能的なイメージをまとったものとして描かれる。

江藤淳は、「夢十夜」や「それから」の百合は、「個人的な秘密」を「反映」しているとし、「いずれにせよそれは性と「罪」の匂いを含んだ体験であり、その相手は嫂の登世以外にはあり得なかったものと思われる」と言う。注16 しかし、「夢十夜」や「それから」でこのような百合を描いた漱石はまた、「それから」執筆中の明治42年6月18日の日記に次の一文を記していたのである。

百合の花の香ひよし。瓶中に二輪咲く。注17

きわめて穏やかな心境のうかがえる一文である。江藤の言うような百合にまつわる実体験を持つ人間がこのような言葉を残すとは考えがたい。

漱石の恋をめぐる詮索は、一時期盛んに行われたが、今日まで定説となるような研究はなかった。注18

また、もし事実と思われるような作家の実体験が見出されたとしても、それを短絡的に作品世界と結び付けるべきではない。これは、今日では自明のことかもしれないが、国語科の授業では、このような裏話が、学習者の興味・関心を引くためにおもしろおかしく語られることがままある。広く先行文献にあたりつつも、授業者は、学習者の読みにバイアスをかけないために心したいところである。

ただ漱石が、百合の花を慈しんでいたことは否定できない。また、「夢十夜」や「それから」の百合の描写をみると、この花は、現実世界では成就することのない愛、あるいは実らぬ恋の表象として描かれているようにも思える。また、「それから」では、「平和な生命」の象徴的表現であると同時に、官能的なイメージをもって描かれていたことをおさえておきたい。さらに、英文学者であった漱石は、キリスト教的な純潔のイメージをもつ百合にも親しんでいたであろうから、漱石文学の百合は様々なイメージを内包した花であることは確かであろう。

この白い百合と対照的なのが、「それからの」冒頭で描かれる「八重の椿」である。椿は、「草枕」でも「池の水が赤くなるだらう」と画工に思わせ、「血を塗つた、人魂の様に落ちる」姿を見せ、読み手に強い印象を残す。この赤は、「それから」においては、代助をこがす焼け付くような炎、あるいは激烈な運命の象徴であるかのような印象を読む者の心に残す。「夢十夜」第一夜の赤い日とも、どこかで通底するものも感じられる。

「それから」の結末部の次の文章などは、第一夜の授業で補助プリントとして配布して読ませるのも、漱石の色彩表現について考えさせる活動としてよい学びとなるのではないか。学習者に明治の作家夏目漱石の肖像を捉えさせる上では、実生活のエピソードを語る以上に、それぞれの作品に共通する表現や思想、情調にふれさせることが大切ではないかと考える。それが、発展読書の契機ともなるだろう。

忽ち赤い郵便筒が眼に付いた。すると其赤い色が忽ち代助の頭の中に飛び込んで、くるくると回転し始めた。傘屋の看板に、赤い蝙蝠傘を四つ重ねて高く釣るしてあつた。－中略－。売出しの旗も赤かつた。電柱が赤かつた。赤ペンキの看板がそれから、それへと続いた。仕舞には世の中が真赤になつた。注19

6．第一夜の先行研究

第一夜の男と女の愛は成就したのか。研究者の見解は分かれる。ここでは、この点を中心に先行研究をみていく。

江藤淳は、第一夜を「Happy ending」ととらえ次のように言う。

> 唯一の明瞭な例外は「第一夜」で、ここでは、百年経ったら必ず逢いに来ると言って死んだ女が、百合の花になって百年目に男の前に現われる、という話が語られている。これは最も楽観的な例であって、「第二夜」の悟ろうとして悟り切れぬ武士が、悟った上で和尚を殺してやろうと思う話になると、もう「第一夜」のような Happy ending だとはいい難い。注20

江藤は、ここで第一夜を「Happy ending」と断定しているが、稿者には、第一夜の文章から「Happy」といえるようなものは伝わってこないように思える。第一夜を「楽観的」と見ることもできない。第一夜全体に漂う静寂、そこには喪失感さえ感じられる。さらに言えば、「Happy」な感情ではなく、静かな哀しみが行間からにじみ出ているように思われてならないのである。このように書けば、論証を欠く、感覚的な批評に堕する恐れがあるが、漱石は、『文学論』において、「文学的内容の形式」について次のように述べていた。

> 凡そ文学的内容の形式は (F ＋ f) なることを要す。F は焦点的印象又は観念を意味し、f はこれに附着する情緒を意味す。されば上述の公式は印象又は観念の二方面即ち認識的要素 (F) と情緒的要素 (f) との結合を示したるものと云ひ得べし。注21

周知の漱石自身の言説だが、第一夜の読みにおいては、この「情緒的要素 (f)」を読み手の感性がどのようにとらえ享受するかが重要である。高校生への指導に際しても、学習者個々の感性を尊重しつつ、同時に本文の表現を離れた読みや恣意的な読みにならないように留意しつつ、授業を進める必要があろう。

平岡敏夫もまた江藤と同じ立ち位置の読みを提示しており、次のように女が「真白な百合に再生した」とする。

> 第一夜は、「百年待っていてください」と言って死んだ女が百年後に、真白な百合となって転生したという夢である。－中略－頬の温い血の色、赤い唇、真黒な眸という生きた肉体性が死ぬことで真白な百合に再生したのであり、ここには百年後に実現した永遠の美と愛が描き出されていると言ってもよい。注22

生身の肉体の百合の花への「転生」あるいは「再生」ということは理解できる。漱石の描く百合には、確かに現実世界や肉体性を離れた「永遠」を感じさせるものがある。平岡も前掲書で引用部分の後でふれているが、前述のように「それから」の百合に通じるところもある。しかし、果たして第一夜に「永遠の美と愛」があるのだろうか。そう呼ぶには男の姿はあまりにも頼りなくかつ受け身にすぎる。そして何よりも、百合の現前する直前に、男は「自分は女に欺されたのではなからうか」という疑いを抱く。それをも包み込む女の愛を読むこともまたできなくはないが、男と女のずれは気になってしまう。

この「自分は女に欺されたのではなからうか」という男の疑いについて、清水孝純は、「自分に信仰と云うものが欠けているからであり、ある意味でそれは人間として当然の疑い」とし、次のように言う。

> そして女の愛は深くて大きい。彼を包んでいる。瞳の中に自分の姿が浮かんでいるというのはその象徴といえるだろう。－中略－遠い空を眺めたとき、自分は女の再生を確認しようとしたのだろうが、星のまたたきは、女のその答えに他ならなかった。こうして自分は再び大きな宇宙によって抱擁されている自分を見出す。－中略－愛するひととのこのような再会を、否定する意見もあるが、ここではそのような問題は取り上げない。重要なことは夢の感触であって、それは直裁的であり、そこには知的裁断を超えたものがあると思うからだ。注23

女の瞳に映る「自分」や「星のまたたき」に象徴的読みを見出した精緻な読みの提示である。「重要なことは夢の感触であって、それは直裁的であり、そこには知的裁断を超えたものがある」という言説も重要であろう。しかし、それでも稿者は「自分は再び大きな宇宙によって抱擁されている自分を見出す」という読みの可能性は認めつつも、「抱擁」が含意する暖かみややすらぎをこの夢の冷たさを感じさせる情景からは読み取れずにいる。

また、小森陽一は、石原千秋との対談の中で、石原の「文学的には百と出てくると、基本的に永遠のメタファーでしょう。ですから永遠に待ってくださいという意味です。このプロセスも綺麗だし上手なんだけど、最後に会ったか会わないかが論争の種になっていますね」という問いかけに対して、「「百合」だから会っているのでは？「百」「合う」だから」と答えている。その上でさらに「ヨーロッパ文化圏のアルファベットではできない、漢字文化圏でしかやれない効果をそれぞれの夢で挙げている。「百年待つてゐて下さい」と「百合」を掛けることだとか、「百」という字が「一」と「白」でできているだとか、文字の図像学というか、それが新聞を読んでいる読者の視覚に訴えてくる」と述べる。注24 小森も、江藤や平岡、清水らの側に立った読みである。ただ、「「百合」だから会っている」というのは少し深読みにすぎはしないだろうか。あるいはこのような言葉遊びを作者が仕掛けたとするには、第一夜全体の沈んだトーンをふまえるとき違和感を覚えるのは稿者だけであろうか。

これらの言説に対し、柄谷行人は、第一夜に対して次のような見方を示している。

> 「百年はもう来てゐたんだな」と気がつくのは、自分がそのとき死んでいるということだ。女が百年経ったら逢いにくるといったのは、ただ「自分」が死ぬことによってのみその女に誰にも邪魔されず会うことができるという意味にほかならないのである。「百年」とは、したがって自分が死ぬという一つの飛躍を意味しており、またこの飛躍が自己(意識)にとっては体験不可能であるために、「百年」の長さという象徴として表現されているにすぎない。そこで重要なのは、百年(死)によってその女と会うことができたということよりも、その女とは生において、すなわち社会的生において結ばれることはできないということだ。注25

桶谷秀昭も二人は逢うことができないという読み方で、「それから」との関係に言及しつつ次のように述べる。

> 赤い日が昇っては沈む夕と朝のこの交替は、『それから』の破局の直前、梅雨明けの頃の代助が庭で眺める情景である。そして代助の中を流れる時間感覚は、『夢十夜』の「自分」が百年待つ間のそれに重なって感じられる。
>
> 石の下から青い茎が伸びて来て真白な百合の花が咲くと、「百年はもう来てゐたんだな」と気がつく。女は遂に逢いにやって来ない。注26

山本勝正も同様の立場でこの夢をとらえている。山本は、「従来おこなわれているように、この「第一夜」に純美なロマンをみ、他の九夜と区別する見方には少なからず問題がある」とし、次のように述べる。

> この男の愛する女性への死の痛みは、百合に彼女を見い(ママ)出すことによって取り除かれたであろうか。ありえることではないが、一度死んだ女が、女それ自体としては、男の前に帰ってこなかったことに、より注目すべきであろう。この男とこの女の関係は、女の死をもって閉じているのである。とすれば、「第一夜」は、表面的には、純美なロマンを、愛の永遠性を志向しているかにみえるが、むしろ漱石は「第一夜」で、一人死んだ女性の墓の傍で、心の痛みをもち続けて百年待っている男の光景を読者に焼きつけようとしているのではないのか。－中略－即ち、現実世界における愛の困難性をこそ、「第一夜」は語っているのである。注27

また、三上公子は次のように言う。

> あるいはこれは百合への転生であり、最後に「自分」はそのことに気付いた、というのであろうか。とすれば二人は〈かつてあった時〉も〈再び見出す時〉もついに一つに溶かし込む永劫輪廻の時間を巡っているのでなければならない。けれども女に疑いを抱くような今の「自分」は直線的な、時間に従っており、それこそ別の巡るような時間を旅する女を永遠に「待つ」て、自身は別の生に変ってはいないのである。
>
> 立ちすくみのように変ることなくひたすら待ちつづけるだけだということが、私には作者の「今人」としての絶望的実感の投影であるとしか考えられない。注28

越智治雄も、これらの評家同様、第一夜の夢を「幸福な夢」とは捉えない。越智は真珠貝、月光等の表象に着目しながら、次のように言う。注29

なるほど、第一夜は幸福な夢にもみえるだろうが、必ずしもそうとはかぎらない。遺言どおり、「自分」は星の破片を拾って女の遺骸を埋めた土の上に置く。星の破片を抱いているうちに彼の胸と手は少しの暖かみを感じることができた。言葉を換えれば、「自分」の胸と手はほとんど冷えている。この美しい夢で痛切なのは、その胸を暖める愛であるよりは、そうした愛への憧憬を必至とする存在の喪失感、そこからする冷え冷えとした感覚だと言ってよいので、ここにちりばめられた真珠貝、月光といった冷たいイメージもまたそれと照応する。つまりこれは漱石の痛き夢なのである。

先に素材的研究の項で提示した稿者の読みも、柄谷、桶谷、三上、山本、越智らの解釈の延長上にある。

これらに対し、松元季久代は、「Happy ending」注30 とすることで、「墓の傍で待ち続けた果てに出現したものが、あの「大きな潤いのある眼」を持つ女そのものではなく、字義どおり一輪の百合でしかなかったという消し難い徒労感や喪失感はほとんど看過されてしまうのである」としつつも次のように指摘する。

ところが逆に、その嘆きや絶望感だけを認め、小品全体を一篇の愛の喪失劇に収斂させてしまうことも、やはりためらわれる。なぜならこの百合は、それを「女」であると認めようと認めまいと濃密な「女」の影を宿しているからである。注31

松元は、このように第一夜をテクストの表現に即して読み解き、「すでに様々な夢解きがなされて来た」注32 研究の状況を批判し、次のように述べる。

女の甦りであるかのような百合の出現――本文を字義通り辿る限り、取り出せるものはこれだけではないだろうか。否、これさえも直喩を借りた現実的論理への翻訳であろう。もっと正確に結論を言えば、「百合が逢いに来た。女は来ない」ということになる。注33

後述するが、テクストの字義から学習者にどこまで解釈・鑑賞をさせていくか、また、指導者は様々に提起される学習者の個の読みに対し、どのように揺さぶりをかけるか、また、指導者自身の読みをどのように定位し、どこまで学習者に提示するか。学習指導の在り方が問われるところであり、松元の問題提起は、文学研究上の問題であると同時に教材研究及び学習指導上の問題でもある。

最後に、従来から議論のある、「夢十夜」は漱石が見た夢の記述であるのか、作家漱石によるフィクションなのかという問題に少しふれておく。阿刀田高は、「漱石といえども、これほどの夢は見るまい。実際の夢とは少なからず異なったものだろう。フィクションであり、精巧に作られた短編のシリーズと見るのが正しい」と断じる。注34

これに対して、松本淳治は、色の種類別出現回数、聴覚、味覚の夢の出現率等を算出し、次のように述べている。

以上のように、『夢十夜』に書かれている文章をそのまま取り上げて、色の種類やそれの現われてくる頻度、感覚別の夢内容の現われてくる頻度などを正常の夢の場合と比較してみると、『夢十夜』の内容は漱石がまったく空想、想像のもとに書き上げたとものは思われない。－中略－もし彼が実際の夢の内容によらずに書いているとするならば、夢のなかの色彩の出現頻度、あるいは感覚別夢の出現頻度などはでたらめになっているはずである。とにかく客観的に内容を分析してみて、『夢十夜』の材料が生理的な夢でないと断定することはできない。ただし、全体をすべて夢とするにはあまりにも微細なところまではっきりしすぎている。－中略－『夢十夜』は実際に漱石がみて思い出した夢の内容を大筋として、さらにそのうえに文学的な肉づけをした作品であるといえるだろう。注35

両者の見解は大きく分かれている。ここで問題にしている作品の主題に関わるものではないが、「小説」としての「夢十夜」を考える上で心に留めておきたいところである。

7. 第一夜の先行実践

福岡県教育センターホームページに掲載の「国語科「国語総合(現代文)」学習指導案」注36 は、1時間扱いの「夢十夜」第一夜の読解指導である。「本時の指導目標（到達目標）」として挙げられているのは次の三点である。

①小説に描かれた情景、「自分」と「女」の関係や心情などを表現に即して読み、それらがどのように設

定されているか、なぜそのように書いているのかなどを主体的に考えようとする。

②主題に的確に迫りつつ、小説に描かれた情景、「自分」と「女」の関係や心情などを表現に即して読み味わうことのおもしろさに気づき、小説を解釈する力を培う。

③文や段落相互の関係を捉えて物語の展開をたどることで、小説の内容や主題を的確に捉えることができることを理解する。

学習者の主体性を尊重し、表現に即して「自分」と「女」の関係や両者の心情を読む中で、読む能力を培い、小説への関心を高めようという意図はよく理解できる。「関心・意欲・態度」、「読む能力」、「知識・理解」、それぞれへの目配りが行き届いた目標設定であり、これに基づいた授業の組み立て方も手堅い。

この目標で気になるのは②の「主題に的確に迫りつつ」の「的確」である。何を持って的確とするのかが見えてこない。「主題」と捉えた内容の問題なのか、主題を捉える方法の問題なのかも把握できない。また、学習の展開を見ると、この「的確」は「主体的に考え」ることを妨げているようにも思える。すなわち、この授業では、あらすじ理解をふまえて主題把握が行われるのだが、「教師の支援・指導上の留意点」にこう記されている。

⑤主体的な発言を促し、二人の間に「愛」があることを認識させる。

⑩二人の愛が永遠で精神性を有することを認識させ、それらが主題に迫る鍵となることを示す。また、「百合」と「女」について理解させる。

もちろんここに示されている指導者の読みが誤っているというわけではない。それは、前述の江藤淳や平岡敏夫の読みに通じる。しかし、その一方で、柄谷行人や桶谷秀昭のような読み方もまた成り立つ。学習者の主体性を尊重し、表現に即して論理をたどらせ、その感性を働かせて考えさせれば、学習者の読みは一つに収斂されるのではなく、二つに引き裂かれるのではなかろうか。また、「自分」と「女」の関係性を丁寧に読み込むならば、「女」の凛とした姿に比べて「自分」はあまりに受け身で頼りない。また、前述のように「自分は女に欺されたのではなからうかと思ひ出した」という一文も看過できない。前述の「的確に迫」らせるとはどのようにさせることかが問われよう。それが、指導者の読みに強引に引きつけることであるのなら問題である。そうであるなら、誘導尋問的に学習者を導いていくような授業や、講義調の指導者が主題を語る授業に傾く危険性が高い。教材研究を重ねた指導者の読みを示すことは学習者の読みを深める上で重要だが、「主体性」を培おうとするならば、同時に異なる解釈も提示し、再度、本文に戻らせ、各自の読みを確立させることが求められるのではないか。第一夜が読み手に開かれたテクストであると思われるだけに、今少し、学習者の個に委ねた展開がなされてもよいように思われる。

この学習指導案と対照的な立ち位置を示すのが、筧美和子の「知識構成型ジグソー法を用いた協調学習授業　授業案」である。[注37]　筧は、次に示す三つの課題の一つを担当してのエキスパート活動、そこでの探究の成果を持ち寄るジグソー活動、さらにクロストーク、アンケートシートへの記入という学習展開を示している。

A　百年という時間について考察する

書き出しの「こんな夢を見た。」という文が持つ効果、日本人の平均寿命の変化のグラフから百年という時間について、女と自分の関係、などを考察する。

B　色彩表現と、出てくる天体について考察する

赤い唇、真っ黒な瞳、白い百合、等の色から想像できることを考察する。暁の星、赤い日、月などの天体は何を例えているのかを考察する。

C　「女」と「百合」の対比を考察する

「女」と「百合」の文中での描写を抜き出し、対比させる。その結果両者にはどのような関係があるかを考察させる。

学習指導案には、「これら３つの観点から、グループ内で自由に意見を出し合う」とある。また、「学習活動のデザイン」の「支援等」の欄には「必要に応じ助言や板書を行う」とあるが、内容にはふれられていない。学習者の読みや主体性を大切にした展開だが、逆に指導者の読みが投げかけられることはなく、オープンエ

ンドに拡散していく印象を受ける。また、主題については「次時以降ジグソーでわかったことを踏まえて取り組ませたい発展的な課題」として、「「第一夜」に込められた作者のメッセージ(主題)を考える」[注38] とある。ここでも指導者の読みや、どのような主題を学習者が提起するかの予想は示されない。活動が前面に出た学習指導案で、アクティブ・ラーニングへの転換や、ジグソー法に取り組むための一つのひな形としての意味は理解できるが、教材の内容についての記述の乏しさが気になる。「夢十夜」についての授業者の見解は、「授業のねらい」に次のように示される。

夏目漱石の小説「夢十夜」は、現実にはありそうにない世界を描いたものである。この短編を読み、虚構の世界というフィルターを通して現実世界を見たときに、自分たちが抱えている違和感や問題を考えるきっかけを得る、という小説の力を感じさせたい。また、ジグソー法を用いて第一夜を精読し、生徒が一人では気づかなかった「読み」に気付き、それぞれの考えを深化させることがねらいである。

ここでも、記述は抽象化、一般化され、作品のプロットや人物造形、指導者が考える主題や内容価値については具体的に書かれてはいない。アクティブな学びを目指した学習指導案には、総じてこの傾向が強い。平成26年度岩手県教育研究会発表資料(補助資料)国語として出された「平成26年度改訂版　学習指導要領を具体化する小・中・高等学校授業づくりガイドブック　子どもにとって魅力ある単元をつくる「読むこと」編」P107～110の「夢十夜」の学習指導案も同様である。「単元を貫く言語活動」として、「内容や構成、表現について評価するために、根拠などを挙げながら客観的にレビューを書く」が位置付けられ、次の目標が掲げられている。

○「夢十夜」の内容を表現に即して読み取り、内容や構成、表現について評価するために、根拠などを挙げながら客観的にレビューを書くことができる。

単元の評価規準もレビューを書くことが中心で、作品の内容をどう読むか、どこまで読むか等に関わる記述はない。単元の展開は全10時間の扱いの中で、レビューの理解、「夢十夜」の通読、第一夜の読み取り、第六夜の読み取り、レビューのモデルの分析、レビューの執筆、レビューの評価という展開になっている。

第一夜には第３時から第５時までが充てられ、次のような学習活動が示されている。

第３時　「第一夜」の内容を読み取る。

１．人物の描写や会話文に着目し、登場人物の関係について考える。・個人／グループワーク／・全体交流

２．登場人物から作品を批評する。

第４時　「第一夜」の内容を読み取る。

１．物語の状況設定や展開に注目し、構成について考える。・個人／グループワーク／・全体交流

２．構成から作品を批評する

第５時　「第一夜」の内容を読み取る。

１．色彩や情景、比喩や擬態語に着目し、表現について考える。・個人／グループワーク／・全体交流

２．構成から作品を批評する

ここには、作品を読み解き、批評するための観点が示されているが、それは概括的で、「夢十夜」でなくともあてはまる。例えば、ここに仮に宮澤賢治の「注文の多い料理店」を入れてみればよい。また、第６時から第８時までは、「第六夜」の内容の読み取りに充てられているが、学習活動は、「第一夜」とまったく同様である。同一の尺度で作品を分析することの意味があるとも言えようが、後述するように「第一夜」と「第六夜」は表現、内容とも異なる点が多く、だからこそ教科書教材としてこの二夜が併載されている考えられるのだが、その点はまったく考慮されていない。「単元を貫く言語活動」についてはすでに様々な批判がなされているが、[注39] レビューを書き上げることありきで、テクストの内容や表現に即した精緻な読みが疎かになる危険性を感じる。

8．第一夜の授業構想

ここまで、第一夜の本文を検討し、先行研究、先行授業実践にあたってきたが、これらをふまえて第一夜の授業構想を描きたい。まず留意したいのは、主題の捉え方は研究者間で異なり、表現に即した吟味・検討を進めても、一つの読みに収斂されるものではないであろうということである。それだけに、例えば、先行実践にみたように、「二人の愛が永遠で精神性を有することを認識させ」といった一定の方向に誘導する指導者の働きかけは極力控える必要がある。さらに言えば、「主題」を「作者が言いたいこと」、「作者がその作品で表現しようとしたこと」等ととらえることも問題となろう。第一夜の人物はそのような単一の「作者の意図」に操られているのではなく、作品世界の中を生き生きと動き、またそれに呼応しながら様々な情景が浮かび上がり、作品世界が展開されていく。

この点について、村上春樹が川上未映子との『騎士団長殺し』についての対談の中で語った言葉は興味深い。

村上は、「頭で解釈できるようなものは書いたってしょうがないじゃないですか。物語というのは、解釈できないからこそ物語になるんであって、これはこういう意味があると思う、って作者がいちいちパッケージをほどいていたら、そんなの面白くも何ともない。読者はガッカリしちゃいます。作者にもよくわかってないからこそ、読者一人ひとりの中で意味が自由に膨（ふく）らんでいくんだと僕はいつも思っている」と語り、さらに次のように言う。

> 書いている人だって正解みたいなのは持ちあわせてないんだという、そのもやっとした総合的なものを、読者がもやっと総合的に受け入れるからこそ、そこに何かそれぞれ自分なりの意味を見出すことができるんです。だから「村上さん、この部分の意味はこうですよね」と読者が僕に尋ねて、僕が「いや、それは違います。これはこうなんですよ」と断言することはできません。注40

「もやっとした総合的なもの」という村上の形容は、前掲『文学論』で漱石が提示した数式 (F ＋ f) の示すものに通じるように思われる。まさに、文学的表象は、観念とそれにまとわりついた情緒の総体であり、優れた文学作品ほど、認識的アプローチのみではとらえられない部分を有するのではないだろうか。

思えば、漱石自身、『三四郎』の予告でこの村上の発言に通じることを述べていた。

> 手間は此空気のうちに是等の人間を放す丈である。あとは人間が勝手に泳いで、自ら波乱が出来るだらうと思ふ。さうかうしてゐるうちに読者も作者も此空気にかぶれて是等の人間を知る様になる事と信ずる。注41

作中人物も、作品の空気も、単一の「作者の意図」によって制御されるのではなく、書くという行為の中で、それぞれが躍動し、もし「意図」があったとしてもそのような当初の作者の意図から離れて動き出していく、そのような小説観のうかがえる文章である。この点をふまえ、第一夜の授業では、「作者の意図」を探るという学び方ではなく、作品の世界の中に投げ出された「自分」と「女」の動きや、作品の情景を丹念に読み込みながら、学習者一人ひとりが、作品の言葉に根ざした自分の地平に立った読みをし、それを他者と交流する中で他者の読みに出会い、今一度自分の読みを問い直しながら、さらに読みを深めていく、そのような学びを求めたい。授業者は、学習者の個の読みを尊重しつつも、読みの矛盾点については再度、本文に立ち戻らせたり、他者の読みとせめぎ合わせたりという積極的な関与をしていくことが大切であろう。また、指導者自身の読みも、「単一の正解」などとしてではなく、一つの読みの在り方として提示したい。そのためにも、指導者の深い教材理解が不可欠となる。このような学びのための問いとして、やはり「「自分」と女の愛は成就したのか否か。その根拠をどこに求めるか。」という問いを持ってきたい。ディベートを組織して肯定・否定に分かれて討論させるのも一つであろう。

以下にこの問いを軸にした授業構想を示す。

○目標　「自分」と「女」の愛は成就したのか否かを、「自分」と「女」の心情や言動、描き出される情景、作品のプロットに即して考える。

○展開案

①　目標を理解させ、学習の見通しを持たせる。

②　作品を丁寧に読ませる。

〇黙読、音読、微音読、範読、視写等の方法を学習者の実態を踏まえて選択し、テクストを丁寧に読ませる。
〇自分の解釈・感想を持たせる。
・テクスト本文に基づく読みを求めると同時に、学習者の感じたことや興味を持った事柄を大切にさせる。
・「自分」と「女」の人物像をとらえさせる。
・「自分」の心情・言動、「女」の心情・言動をとらえさせる。
・周りの情景とその変化をとらえさせる。
・色彩表現に着目させ、それぞれの色のイメージや意味するものについて考えさせる。
・「百年」の意味について考えさせる。
・百合が「自分」の前に現れたことの意味を考えさせる。
・感想文、あるいは鑑賞文を書かせる。
＊初発の感想を書かせてから、上記のことについてより深く考えさせる展開と、上記のことを分析的に考えさせた上で、鑑賞文を書かせる展開が考えられる。
③ 「自分」と「女」の愛は成就したのか否かについて話し合わせる。
＊学級全体での話し合い、グループでの話し合いとその結果のシェア、代表者によるディベート等の方法が工夫できる。
＊できれば、授業者の解釈や複数の研究者の異なる解釈を適切なタイミングで提示し、揺さぶりをかける。
④ 発展学習 (充当できる授業時数や学習者の実態に即して)
発展学習として、以下のような学習活動が考えられる。
〇研究者の論文の抜粋を読ませ、複数の解釈・鑑賞にふれさせ、それらをふまえた作品論を書かせる。
〇「赤い日」について第七夜や「それから」の赤等と結んで考えさせる。他の作家の色彩表現とも比較させ、色彩の効果について考えさせる。
〇百合の花の持つイメージや百合にまつわる物語等について調べさせる。
(第一夜の学習に続き第六夜や他の夢について学習させる場合は、以下は、それらの学びを終えた後で)
〇「夢十夜」全編を読ませ、印象に残った夢について意見交流をさせる。
〇夏目漱石とその作品、その時代について、学習者に調べさせたり、授業者が読書案内や日本の近代文学案内として語ったりする。夏目漱石の他の短編を、一編選ばせて読ませてもよい。
⑤ 学びの振り返りをさせる。

9．第六夜の教材研究

第六夜の筋立ては、次のようなものである。運慶が護国寺の山門で仁王を刻んでいると聞いた「自分」は、現地に出かけて行き、運慶の見事な仕事に感嘆する。しかし、近くにいた「若い男」は、「眉や鼻が木の中に埋まつてゐるのを、鑿と槌の力で掘り出す迄」であるから、「決して間違ふ筈はない」と言う。そこで、「自分」は、帰って何本もの木から仁王を掘り出そうとしてみるがついに掘り出すことはできない。このとき、「明治の木には到底仁王は埋まつてゐないものだと悟」り、「運慶が今日迄生きてゐる」ことに納得する。

この夢は、先の第一夜にくらべて寓意的で、意図的に構成されたように感じられる。仏像が木の中に埋まっているという表現は、ときに仏師等からも聞かれることがあり、わが国でもときおり耳にすることのある言説である。出典については後述する。また叙情的な第一夜に比べて論理で引っ張っていくような書き方である。鎌倉時代と明治の対比は文明批評的である。「こんな夢を見た」という冒頭の一文もない。第一夜とは様々な点で対照的である。色彩表現においては、「遠い青空」、「松の緑と朱塗の門」という表現があるが、第一夜の赤や白ほど強いイメージを喚起しているようには思えない。この夢では、なぜ明治の木には仁王が埋まっていないのか。運慶が今日まで生きている理由はどこにあるのかが読みの上での課題となろう。「明治」という時代は現代の高校生には遠いと思われるが、調べ学習も取り入れつつつつ、現代社会の問題点とも結びながら考えさせたいところである。

瀬沼茂樹は、「「第六夜」の運慶の話はわかりよいもので、とげがたい願望をしめしている」とする[注42]が、

「とげかだい願望」の意味するところがはっきりしない。失われた過去、日本的なものへの回帰、近代以前の日本人の生き方の回復等が考えられようか。

また、三好行雄は、「自然との一体化を喪失した明治文化への絶望と批判を語る」とする。注43 「自然との一体化を喪失した明治文化」という捉え方に着目しておきたい。

これらに対して、石井和夫は、次のような第六夜の解釈を示している。第六夜の一つの捉え方を明確に示した言説である。

> 「第六夜」は「レオナルド・ダ・ヴィンチの手記」に、「彫刻家はその作品の制作にあたって、石の奥に包まれている人物に附着する余計な大理石その他の石を削りとる」(杉浦明平訳)と記された芸術観を形象化したものである。その対象として「仁王」が選ばれたのは「第五夜」の「天探女」からの連想で(仁王像は天探女を踏みつける様式をもつ)、また、「仁王、－技巧以外ナリ。」(明治40頃断片)のメモの前後に書きとめられた「人格」を反映させた「技巧」の主張、あるいは、「文明の革命」への強固な意志を語って「仁王」に喩えられた「二百十日」の「圭さん」の形象の発展として、「運慶」の「仁王」が発想されている。運慶の仁王には上昇気運に乗る鎌倉武士の「ますらおぶり」が刻まれている。これに対して、「明治ノ三十年ニハ過去ナシ。単ニ過去ナキノミナラズ又現在ナシ。」「現代ノ青年ニ理想ナシ。過去ニ理想ナク、現在ニ理想ナシ。」「四十年ノ今日迄ニ規範トナルベキ者ハ一人モナシ。」(明治39断片)などのメモに窺われるように、「明治」はいまだ形象するに足る時代の精神を内在していないとの思いが漱石の胸中にあって、この主題を芸術の創作理論に託して表現したのが「第六夜」である。注44

なお、石井が「レオナルド・ダ・ヴィンチの手記」とする出典について、前掲『定本漱石全集』第十二巻も、註解で、「この彫刻観は、『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』中の彫刻と絵画を比較し、彫刻は肉体労働にすぎないとおとしめているくだりに見出すことができる」とし、漱石はメレシコフスキーの三部作『キリストと反キリスト』のうちのレオナルド・ダ・ヴィンチを主人公とする第二部『神々の復活』の英訳『先駆者』に依拠したと思われるとし、その原文と訳を示している。注45

このような先行研究からも、第一夜の夢が、「自分」と「女」の閉じられた世界で展開されるのに対して、第六夜の夢は、「明治」という作者にとっての現代の人間や文化の有り様を批判的に見つめた社会性のある夢であることが確認できる。作者のまなざしは、西欧化や文明開化の中で失われた日本的なものの価値に向けられおり、「現代日本の開化」等の文明批評にもつながっていく作品である。教科書に、性格の異なる二つの夢を併載することで、学習者に夢十夜の多様な夢の世界の一端にふれさせることができる。すなわち、第六夜は、学習者に「明治」という時代やその延長上に位置する日本の近現代について考えさせる作品であり、時空を超えた普遍性を持つ、男と女の愛、あるいは男と女の認識の違い、はかない人間の生と永遠の時間等々について思いをはせることのできる第一夜と併せ読むことで、学習者は「夢十夜」を通して、漱石文学の広さあるいは深さにふれることができる。その意味で、「夢十夜」の現行教科書への採録箇所が第一夜と第六夜に集中したのも理解できる。しかし、神話的世界を舞台にたたみかけるような劇的展開で悲恋を描く第五夜、次節でふれる第七夜、戦争(いくさ)に引き裂かれる家族の哀しみを書く第九夜等、高校生に読ませたい夢の世界は多い。教材編成にあたっては、安易な定番化とその継承はさけられるべきであろう。また、教科書に掲載されていなくても、学習者の興味・関心や指導者の意図等に即して、投げ込み教材として前述のような夢を学習者に提供することも大切であり、そのための教材研究も求められる。

10．第七夜の教材価値

前述のように、現行の教科書に掲載されているのは第一夜と第六夜に限られているのだが、高校生が惹かれるのは第七夜であるという足立悦男の研究がある。足立は、高校二年生の生徒に「第一夜」、「第四夜」、「第六夜」、「第七夜」注46 を読ませたところ、「このクラスの場合、「第七夜」が圧倒的な人気であった」という。この結果について足立は、「おそらく教科書の編者にとっても、意外な結果であったと思われる」とし、「もちろん、一クラスのデータなので一般化はできないが、「第七夜」は、現代の高校生にとって「夢のテキスト」として、人気の高いことは確かなようである」とする。注47 その上で、足立は、次のような見解を示している。

生徒たちは、一般に、文学テキストの表層を読む傾向にあった。しかし、「第七夜」からは、ある「重み」を感じとっている。その「重み」とは何だろうか。－中略－　一言でいえば、生徒たちの感じている「死への不安」を、この作品が引き出した、ということである。

生徒たちの「死への不安」は、ふつう内部にあって表に出ることは少ない。その「死への不安」が、「第七夜」という教材によって、表に引き出された。小説というテキストは、生徒たちの内部にひそんでいて、日頃表に現れない漠然とした内面世界を、表に引き出す働きがある。文学テキストに特有の教材価値といえる。注48

さらに足立は、このような生徒たちに「専門の文学研究者の読み」を提示して「ゆさぶり」、広げていくことを提唱している。第七夜にも多くの先行研究があり、根源的な生の不安、群衆の中での孤独、西欧文明への違和感等々、様々な読みが提示されているが、これについての考察は他日を期したい。なお、ここでは、第七夜にのみふれたが、他の夢も高校生が学ぶ意義のある文学的価値を持っている。漱石文学入門としても、格好の教材となろう。現行教科書所収の二夜にとどまらない「夢十夜」の教材開発、学習指導の工夫が必要である。

11．おわりに

若者の文学離れが進んでいる。また、教養主義の終焉が言われるなか、従来のように、漱石、鴎外や芥川等がスタンダードとして読まれることも少なくなった。しかし、このような状況下でも、漱石は今なお根強い読者層を持ち、没後100年、生誕150年の節目には、新聞紙上に代表作が再連載され、新全集も現在刊行中である。

漱石の作品世界は、ユーモアにあふれた明るい色調のものがある反面、我執や人間不信をえぐったり、運命に翻弄される人間や、生そのものの不安、近代文明のもつ危うさを描いたりした、陰影のあるものも多い。しかし、そんな暗さの中にも弱い人間をいとおしむ優しさや、どこか心が洗われるような澄んだ情調が感じられる。漱石文学には、まさに人の心を癒し解放させる「f」が、「F」として提示される暗く重いテーマと共に存在し、それが人をその言葉に向かわせるのではなかろうか。稿者自身、何かに行き詰まったり、辛い思いにうちひしがれたり、自己嫌悪に陥ったりしたそのときに、何度も漱石を読み返し、その言葉の力に救われてきた。姜尚中も、「同世代の学生たちの例にもれず、十代のころから漱石作品に触れていました」と述べ、「漱石の言葉」を「洞窟の中をとぼとぼと歩き続けた私」に与えられた「淡いペンライトのような光」と形容し、「私は、地下室の中から私を連れ出してくれるメンターを求めていたのです。間違いなく、漱石はその一人でした」と言う。注49　思えば、私たちの世代までは、多感な十代の頃に漱石と出会い、その作品に親しみ、その作品世界の中に居場所とも言うべき場所を見出してきた者が少なくない。そして、年を重ねる中でもつまずいたときなどに漱石を読み返し、その言葉を支えとしてきた。漱石はけっして「教養」などではなく、姜の言うようにまさに「メンター」であり、道を照らす人であった。文学の衰退や近代文学の終焉注50が言われて久しいが、稿者は、漱石を読み返す度に文学の力を感じ、文学的言語の価値を再認識してきた。それだけに、若い人たちをも漱石文学に誘う、魅力的な授業を展開したいと願ってやまない。そのためには底深い教材研究が不可欠である。これがあってこそ、日本の近代文学を媒介とした主体的・対話的で深い学びが可能になる。

注1　『国語科教育方法論大系２　国語学力論と教材研究法』飛田多喜雄　明治図書　1984.5 P96

注2　前掲書 P97

注3　中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方針等について(答申)(中教審第197号)」の「第２章各教科・科目等の内容の見直し」の「国語」の項には、「高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある」との文言がある。

注4　「学習集団研究の課題と展望(Ⅳ)－授業構成の関係論的パースペクティブ－」・『教育学論集　第26号』

大阪教育大学教育学教室　1997.12 P45 ～ P46
注5　『おかしいぞ！国語教科書　古すぎる万葉集の読み方』梶川信行編　笠間書院　2016.11 P6
注6　『定本漱石全集』第十二巻　夏目金之助　岩波書店　2017.9　P782
注7　『四篇』夏目金之助　春陽堂　1910.5 ・『名著復刻　漱石文学館　夏目漱石著　四篇　春陽堂版』名著復刻全集編集委員会　日本近代文学館・ほるぷ　1975.11 の奥付による
注8　『漱石文学全集別巻　漱石研究年表』荒正人　集英社　1974.10 及び「近代作家年譜集成」・『國文学』4月臨時増刊号　1983.4 (「夏目漱石」の項は佐藤泰正の執筆) を参照した
注9　『國文学　解釈と教材の研究 2月臨時増刊号　編年体日本近代文学史』學燈社　1976.2 P90 ～ P91
注 10　前掲『定本漱石全集』第十二巻　P652　なお、『定本漱石全集』の断片を収録した巻は、本稿執筆時に未刊のため『漱石全集』第十九巻　夏目金之助　岩波書店　1995.11 P380 を参照した。
注 11　『漱石はどう読まれてきたか』石原千秋　新潮選書　2010.5 P18 ～ P19
注 12　「近代文学瞥見」三好行雄・「海燕」1986.4 ～ 1987.4　引用は『近代文学研究とは何か　三好行雄の発言』『近代文学研究とは何か』刊行会編　勉誠出版　2002.5 P278
注 13　『定本漱石全集』第十二巻　夏目金之助　岩波書店　2017.9　P782 ～ 783
注 14　『四篇』夏目金之助　春陽堂　1910.5 引用は、『名著復刻　漱石文学館　夏目漱石著　四篇　春陽堂版』名著復刻全集編集委員会　日本近代文学館・ほるぷ　1975.11　P25
注 15　『それから』夏目金之助　春陽堂　1909.12 引用は、『名著復刻　漱石文学館　夏目漱石著　それから　春陽堂版』名著復刻全集編集委員会　日本近代文学館・ほるぷ　1975.11　P340
注 16　「登世という嫂」・『決定版夏目漱石』江藤淳　新潮文庫　1979.7　2005.3 改版　P509
注 17　『漱石全集』第二十巻　夏目金之助　岩波書店　1996.7 P50
注 18　江藤淳による嫂登世説とともに大塚楠緒子説も小坂晋らによって展開された。(『漱石の愛と文学』小坂晋　講談社　1974.3) 江藤の説は、大岡昇平により、批判され (『文学における虚と実』大岡昇平　講談社　1976.6)、江藤、大岡の間で論争が展開された。
注 19　前掲『それから』 P431
注 20　前掲『決定版夏目漱石』　P93 ～ P94
注 21　『文學論』夏目金之助　大倉出版　1907.5 引用は、『名著復刻　漱石文学館　夏目漱石著　文學論』名著復刻全集編集委員会　日本近代文学館・ほるぷ　1975.11　P1
注 22　『夏目漱石　『猫』から『明暗』まで』平岡敏夫　鳥影社　2017.4　P250 ～ P251
注 23　『漱石『夢十夜』探索　闇に浮かぶ道標』　清水孝純　翰林書房　2015.5 P48 ～ P49
注 24　『漱石激読』石原千秋・小森陽一　河出書房新社　2017.4　P121
注 25　『新版漱石論集成』柄谷行人　岩波現代文庫　2017.11 P71 ～ P72
注 26　『夏目漱石論』桶谷秀昭　河出書房新社　1972.4　P88
注 27　『夏目漱石文芸の研究』山本勝正　桜楓社 1989.6　P73
注 28　「「第一夜」考－漱石「夢十夜」論への序」三上公子・『漱石作品論集成』第四巻　鳥井正晴・藤井淑禎編　桜楓社　1991.5 P256
注 29　『漱石私論』越智治雄　角川書店　1971.6 P127 ～ P128
注 30　前掲『決定版夏目漱石』P94 の江藤淳の指摘
注 31　「『夢十夜』第一夜－字義的意味の蘇生－」松元季久代　『日本文学』　VOL.36　日本文学協会　1987.8　P65
注 32　前掲論集　P64
注 33　前掲論集　P66
注 34　「夜の風見鶏」阿刀田高 1995.7.2　朝日新聞　引用は、『夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅲ』坂本育雄編　大空社　1996.6 P506
注 35　「漱石の『夢十夜』は創作か」・松本淳治・『眠りと夢を科学する』松本淳治　大月書店　1995.6　引用は、

前掲、『夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅲ』P504 ～ P505

注 36　福岡県教育センター http://www.edu.pref.fukuoka.jp　指導案データベース　2018.1.16 閲覧

注 37　http://coref.u-tokyo.ac.jp　2018.1.16 閲覧

注 38 「主題」については、村上春樹及び漱石自身の言葉を引きながら後述する。

注 39　小森茂は、「「単元を貫く言語活動」の“轍”を踏まないために」という小見出しを掲げ、「「単元を貫く言語活動」等の授業づくりに奔走した」「一部の雑誌や都道府県の指導主事等」を批判している。「新学習指導要領・国語は、どのように実現するのか－国語科授業は学習指導要領だけでは実現できない」・『教育科学国語教育』No817 明治図書　2018.1

注 40 『みみずくは黄昏に飛びたつ　川上未映子　訊く／村上春樹　語る』 川上未映子　村上春樹　新潮社　2017.4 P116 ～ P117

注 41 「新作小説予告「三四郎」」1908.8.31 朝日新聞　引用は 2014.9.30 の朝日新聞朝刊に転載されたものに拠る

注 42 『夏目漱石』瀬沼茂樹　東京大学出版会　1970.7 P142

注 43 『文鳥・夢十夜』夏目漱石　新潮文庫　1976.3 P326　解説

注 44 「「夢十夜」－われらが夢想実験の場　第一、六、七、九夜を中心に」高校通信 25-2　石井和夫　教育出版　1991.2 引用は、『夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅲ』坂本育雄編　大空社　1996.6 P295 ～ P296

注 45　前掲『定本漱石全集』第十二巻　P658 ～ P659

注 46　足立の調査時には、いずれも教科書に所収されていた。

注 47 「現代高校生の夢と漱石の夢」足立悦男・『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ　1』田中実・須貝千里編　右文書院　1999.2 P158

注 48　前掲書 P162 ～ P163

注 49 『漱石の言葉』姜尚中　集英社新書　2016.3 P21 ～ P23

注 50　柄谷行人は、「予期に反し、1990 年代に入って、ソ連邦が崩壊しグローバルな世界資本主義の浸透が進むにつれて、文学は新たな力をもつどころか急激に衰え、社会的なインパクトを失い始めた。文字通り、「近代文学の終焉」が生じたのである。しかも、それは日本だけの現象ではなかった」と述べている。『定本日本近代文学の起源』柄谷行人　岩波現代文庫　2008.10 P 2

参考文献

『漱石文芸の世界』水谷昭夫　桜楓社　1975.6
『作品論　夏目漱石』内田道雄編　双文社出版　1976.9
『國文学　解釈と教材の研究　特集　夏目漱石－作品に深く測鉛をおろして』學燈社　1976.11
『漱石文学の研究－表現を軸として－』相原和邦　明治書院　1988.2
『國文学　解釈と教材の研究　1月臨時増刊号　夏目漱石の全作品を読む／文学批評を読む』學燈社　1994.1
『漱石論－鏡あるいは夢の書法』芳川泰久　河出書房新社　1994.5
『漱石の夢の女』吉田敦彦　青土社　1994.10
『夏目漱石の言語空間』山崎甲一　笠間書院　2003.1
『近代文学研究叢刊 29　夏目漱石論－漱石文学における「意識」－』増満圭子　和泉書院　2004.6
『漱石の病と『夢十夜』』三好典彦　創風社出版　2009.8
『漱石における〈文学の力〉とは　梅光学院大学公開講座論集　第 64 集』佐藤泰正編　笠間書院　2016.12